

平成 30 年度 MieMu の活動と運営の外部評価結果（概要）

【評価結果】

- ・ 展覧会事業について、基本展示の観覧者数、企画展示の総観覧者数の双方において、目標の人数に到達していない。特に、基本展示（63,568 人）は、初年度（184,981 人）の 34%にまで減少しており、他館との比較の上でも、憂慮すべきである。また、企画展示は、「松浦武四郎」展では目標を上回る観覧者を得たが、総数（60,153 人）は昨年度（79,411 人）をかなり下回る結果となった。リピータの数は、特に企画展示（76%）でかなり高い割合を得ており、「何度も利用してもらおう」という戦略目標は、企画展示では達成できたと判断できるが、基本展示における値（56%）は、むしろ、新規来館者が期待できることを示している。
- ・ 広報活動については、メディアへの働きかけや、今日的な手法である SNS を使った活動を積極的に展開することで、目標とした結果（アウトプット）を達成できた。あわせて、県民の認知度（初年度 67%）も毎年向上し、今年 5 月の調査で 80%にまで達したことは、地道な活動の成果と評価できる。
- ・ 博物館活動への県民や利用者の参画について、毎年、企業等への積極的活動が成果を上げてきた反面、ミュージアムパートナーの登録者数は 2 年続きで目標に届かず、ボランティアの登録者数は、平成 29 年度の 39 人から今年度は 21 人、活動回数も 178 回から 92 回と大幅に減じている。いずれも放置できない状況にあり、改めて、取組の見直しが求められる。
- ・ 収蔵資料や地域の文化財等の保存・保全にあたっては、残念ながら一部で虫害が発生したが、早期に適切な処理ができた。地域の文化財等を保全するため、各種の相談や指導に当たる活動については、目標の相談件数（60 件）を超える対応（67 件）ができた。また、適切な指導・助言を通じて資料の寄贈・寄託に繋げるなど、公立館としての役割が果たせた。
- ・ 研究活動については、ようやく改善の兆しが見える。学芸ゼミでは目標の 12 件を達成でき、参加型調査でも目標（60 人）や昨年度（89 人）を上回る参加者（123 人）を得たことは評価できる。一方で、県民等への成果公開の一環であるデータベースの新規公開登録が 57 件（昨年度 513 件）に留まったことは、アクセス数が目標に達しなかったこと（目標 5,000 回、実績 4,347 回）と合わせて、改善が求められる。

- ・ 利用者の学習支援については、レファレンスカウンターへの職員の常駐が見直されたが、資料閲覧室での対応などを通じて、384 件の相談に対応できたことは、学習支援とともに県民サービスの面でも評価できる。また、学校や教員向けのプログラムについては、さまざま工夫を凝らして活動を展開している。児童生徒や学校数が減る状況で、過去や前年度実績との単純比較はできない。
- ・ 評価制度を活用した経営資源の効果的配分（業務改善）について、この間指摘された「進捗管理」が、四半期ごとにできたことは評価できる。また、時間外勤務時間がかなり減り安定化してきたことや、過去に何年も指摘された調査・研究業務の時間を確保することが、少しずつではあるができてきていることは、経営資源の適正な配分が進みつつあると評価したい。

【まとめ】

昨年度（平成 29 年度）の本外部評価結果（概要）では、「平成 30 年度はさらに業務の見直しを行い、経営資源の適正な配分による偏りのない博物館活動をめざすこと」に努めることを求めた。

その結果、レファレンスカウンターへの職員の常駐を見直すとともに、交流展示及びトピック展示を一時休止することにした。また、機能向上に向けた開館時間の見直しの調査を行い、今年度後半からは開館時間を 17 時（従前は 19 時）までに短縮する方向で調整している。実態に即した対応への英断に敬意を評するとともに、今後も、こうした見直しの成果を、経営資源の効果的配分の観点からも、インセンティブの付与の観点からも、ぜひ、有効活用して欲しい。あわせて、研究費の確保や職員の意識高揚のためにも、科学研究費補助金の研究機関指定に向け、積極的に取り組まれない。

さて、平成 30 年度の評価結果を、改めて表 1 にまとめた。毎年、館がおかれた環境（社会環境、地域の動向、県の行財政方針など）が同じとは言えないため、単純に数値の増減に一喜一憂はできないが、結果は一定の傾向を示していると言える。

まず、展示に関する事項で低下が目立つ。主因は観覧者数の減少によるもので、特に基本展示では、一旦上向いた対前年度比が 89%⇒93%⇒83%と減少に転じたことは、注意を要する。企画展示も含め、まず原因をしっかりと分析すること、さらに分析結果に基づく対策を早急に講じることを求めたい。

また、戦略3の「利用者等の活動への参画」において評価が下がった。戦術8の「企業の参画促進」が毎年、優れた成果を上げていることに比べ、ミュージアムパートナーやボランティアの参画・活動が低調である。前述の通りミュージアムパートナーの登録者目標（280名）は平成29年度も不達成（272名）で、昨年度も「新たな登録者の獲得に向けた努力が求められる。」と指摘したところである。また、ボランティアは登録者数と活動回数がともに大幅に減じている。改めて制度の内容、活動における満足度の向上など、再検討が急がれる。

次に、改善が進んだ部分として、調査研究に関する戦術12（学芸ゼミ）と戦術17（進捗管理）が指摘できる。これは、少なくとも戦術17（進捗管理）が定期的に行われるようになり、【まとめ】の冒頭でも触れたように、昨年度辺りから徐々にではあるが、改善の具体的手立てが打たれて来たことによる効果と判断できる。

このように、開館後5年が経過する中で、当館の業務改善は徐々にではあるが軌道に乗り、成果が出つつあると考えられる。こうした経過や経験を生かして、上記で指摘した観覧者の確保や、利用者参画事業の見直しに努めることで、さらに利用者や県民に対するサービス向上が図られることを期待します。

【付記】

今年度の評価において、3年の期中であるが、評価の目標値が館側の事情で変更となった。

また、戦術の評価において、「結果」と「成果」の双方で判定することによる矛盾を来す例が散見され、当部会からは昨年度も改善を指摘した。

そこで、今年度の本外部評価では、戦術は「結果」のみに依拠し、新たに変更となった目標値を念頭に評価を下したことを付記します。

最後に改めて、使命や計画に基づく矛盾の無い戦略・戦術の策定、適正な評価指標の選定、適切な目標値と達成期間の設定をお願いしたい。

表1 評定点の推移 (2017～2019年度)

戦略	2017年度	2018年度	2019年度	差	戦術	2017年度	2018年度	2019年度	差
戦略1 (展示)	4	3		-1	戦術1	4	2		-2
					戦術2	2	2		0
					戦術3	4	2		-2
戦略2 (広報)	4	4		0	戦術4	4	4		0
					戦術5	4	4		0
					戦術6	4	4		0
戦略3 (市民参画)	4	2		-2	戦術7	3	2		-1
					戦術8	4	4		0
					戦術9	4	1		-3
戦略4 (資料保全)	4	3		-1	戦術10	4	2		-2
					戦術11	4	4		0
戦略5 (調査研究)	3	3		0	戦術12	1	4		3
					戦術13	4	4		0
					戦術14	4	2		-2
戦略6 (学習支援)	4	4		0	戦術15	4	4		0
					戦術16	2	2		0
戦略7 (業務改善)	3	3		0	戦術17	2	4		2
合計	26	22	0	-4		58	51	0	-7
百分比	93%	79%				85%	75%		

「差」とした2列の値は、2017年度と2018年度の比較。